

2021年 恭賀新禮

2020年を回顧しますと、前年との明暗がはっきりするように思われます。2019年を振り返りますと、いろいろな出来事がすぐに思い浮んでまいります。天皇陛下が即位し、ラグビーW杯で初の8強入りし、吉野彰氏がノーベル化学賞を受賞し、探査機はやぶさ2が小惑星リュウグウの着地に成功するなどの喜ばしい話題がありました。その陰で、東日本が台風大雨で大きな被害を受け、京都アニメーション放火で多数の方が亡くなり、沖縄の首里城が焼失したなどの悲しい出来事もありました。



しかして、2020年とは？2020年はなんだったか？であります。「自粛」「忍耐」「沈黙」「懸念」「落胆」「逼迫」「崩壊」等といった言葉が並びます。ある人にとっては読書を大いに楽しむことができたとか、対面を避けて別の方法で人と対話できた年だったかもしれません。目出度い出来事とは一体何であったかという問いには詰まるような年でした。かといって2020年は無為に過ごした時ではありませんでした。待つことによってやがて来る何かを期待しながら過ごしてきた年であります。

2020年は中国の武漢が注目を集めました。武漢は揚子江に面する大都市です。歴史を戻してみますと、紀元前100年頃は武帝による治世である前漢の全盛期といわれた頃です。漢の首都は長安でしたが、武漢もたいそう栄えたようです。武帝の絶対的な権威は、やがて反感や農民の反乱を誘発し、退廃や衰退をもたらします。その時代に書かれたのが『史記』という歴史書です。武帝は中国の栄光や繁栄の時代をもたらしたのですが、やがて彼の治世の後半は悪政によって民衆を疲弊させたという評価もあるようです。

武帝の治世を物語る故事があります。それが「禍福はあざなえる縄のごとし」です。このフレーズの語源は『史記』に由来します。「あざなえる」とは広辞苑によりますと「まじり合わせる」とか「綱をよう」とあります。良いことと悪いことが互い違いに起こる、良いことがあれば悪いこともある、ということですから。目の前のことに一喜一憂せず、物事は長い目で見るのが大切だという意味だそうです。しめ縄は飾りだけではありません。驕る気持ちを戒めるとも

に、物事がうまくいかないときは、気持ちを前向きに保つということを教えています。

もう一つ、前漢時代の古典である思想書に『淮南子(えなんじ)』があります。これも武帝の治世に書かれた書物です。この中に、我が国でも良く知られた故事「人間万事塞翁が馬」があります。一老翁の飼っていた馬が、ある日胡の国に逃げますが、数か月後、胡の駿馬を連れて戻ってきます。翁の息子がその駿馬に乗りますが落馬して足を折ります。幸か不幸か、息子は戦場への徴発を免れたという話です。同じく広辞苑によりますと、この故事は「世の吉凶禍福は転変常なく、何が幸で何が不幸か予測しがたいこと」とあります。この諺は2020年の世相を予見していたかのようです。

二つの故事成語がいわんとする教訓とは、辛いことや心地良いことは長続きするものではないということです。物理学者の寺田寅彦は「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を残したことで知られています。忘れがちになる人間の性(さが)を指摘しています。2020年の世相を形容すれば「正しく怖がることが難しい年であった」とでもいえるでしょうか。

「文明が進むほど自然災害が激烈になる」という識者もいます。東日本大震災による福島原発事故はその例でしょう。文明の発展にあぐらをかくと、そのしっぺ返しがあるということです。微妙な生態系がいつの間にか崩れて、自然も脆くなるのです。人間の無定見さの犠牲になるのは、いつも植物や動物です。そして人間はその跳ね返りを受け、「こんなはずではなかった、、」、「想定外であった、、」と呟くのです。「天・地・人」の調和がとれて、初めて良い何かを得られることを私たちは学ぶのです。

2021年が皆様にとりまして至福の年となりますよう祈ります。

八王子囲碁連盟会長 成田 滋